

"今"を分かち合い絆深める

第18回ホームカミンググデー



高野克己学長 多くの来場者で賑わう会場の様子



東京農大は今年創設127年目を迎えた。建学の精神「人物を畑に還す」のもと、輩出した17万人超の卒業生は国内外のさまざまなフィールドで活躍している。ホームカミングデーは、卒業生に現在の東京農大を体感して

創立記念を祝う会並びに第18回東京農大ホームカミングデーが6月16日に世田谷キャンパスで開催され、参加者は600人を超えた。東京農大は今年創設127年目で、輩出した卒業生は17万人超。日本そして世界で活躍する先輩たちの姿は現役学生を刺激し、目標となる。ホームカミングデーは、卒業生と現役学生が東京農大の「今」を分かち合い絆を深める場だ。

はじめて高野克己学長があいさつ。大学の大きな変化として改組を挙げ、平成29年度の生命科学部新設▽応用生物科学部か



募金高額寄付者の大橋邦夫さん(左)と鈴木吉助さん

また、昨年度をもって閉学した短期大学部について、「その精神は、時代のニーズに合わせた新たな学部学科となっても継承されており、今後も農の領域を広げていきたい」と語った。

続いて、今年4月から行ってきた農学部、生物資源開発学科とデザイン農学部の新設▽畜産学科を動物科学科へ、生物応用化学科を農芸化学科への名称変更を報告。さらに、北海道の生物産業学部を「北海道の大地で学べる学科」ということを表に出す。狙いで北方圏農学科、海洋水産学科、食香粧化学科、自然資源経営学科へとそれぞれ名称変更したことを説明した。

東京農大生命科学部バイオサイエンス学科の創立20周年を記念し、「生命科学の未来に向けて」というテーマでのシンポジウムが5月9日、世田谷キャンパス横井講堂で開催された。分野最前線で活躍する卒業生や学内外の関係者が参加し、発表に聴き入った。

として感謝状を受けた鈴木吉助さんは「大学での学びが基礎となり今の自分があるため、母校へ恩返ししたい」と、本学への思いを語ってくれた。集まった寄付金は東京農大大学国際センター(仮称)建設に使われる予定で、ここを拠点に本学の教育研究の成果を世界へ発信していくとしている。

農大貢献賞は、農学分野の発展及び東京農大の発展に貢献したと認められる者に対して授与される。今年度は、農学分野の発展及び東京農大の発展に貢献したと認められる者として、松林尚志教授(農学部生物資源開発学科)が受賞した。受賞講演では、「ボルネオ熱帯雨林の野生動物の生態と生息地保全」というテーマで松林教授が学生時代から現在まで一貫して行ってきた研究が紹介された。



農大貢献賞の受賞講演をする松林教授

特別記念講演は、スプリント種目の世界大会の日本人初メダリストとして著名な為末大さんを講演者に迎え、「ハードルを越える」と題して行われた。為末さんは自らの陸上競技での経験を例に、自分の可能性を開くには「楽しむ能力が大切」と話した。

最先端の生命科学研究と教育を

バイオサイエンス学科開設20周年

東京農大生命科学部バイオサイエンス学科の創立20周年を記念し、「生命科学の未来に向けて」というテーマでのシンポジウムが5月9日、世田谷キャンパス横井講堂で開催された。分野最前線で活躍する卒業生や学内外の関係者が参加し、発表に聴き入った。



冒頭のあいさつで実行委員長の高野克己学長は、「生命科学の未来に向けて」というテーマでのシンポジウムが5月9日、世田谷キャンパス横井講堂で開催された。分野最前線で活躍する卒業生や学内外の関係者が参加し、発表に聴き入った。

冒頭のあいさつで実行委員長の高野克己学長は、「生命科学の未来に向けて」というテーマでのシンポジウムが5月9日、世田谷キャンパス横井講堂で開催された。分野最前線で活躍する卒業生や学内外の関係者が参加し、発表に聴き入った。

冒頭のあいさつで実行委員長の高野克己学長は、「生命科学の未来に向けて」というテーマでのシンポジウムが5月9日、世田谷キャンパス横井講堂で開催された。分野最前線で活躍する卒業生や学内外の関係者が参加し、発表に聴き入った。

親子三代表彰

親子三代にわたり東京農業大学を卒業(在学中含む)したご家族5組に対し、高野学長から賞状と記念品が贈呈された。農学部農学科を卒業後、山梨県で果樹園を営む秋山光彦さんが代表して挨拶。「親子三代で東京農大で学び、このような表彰を受けることを嬉しく思う。今後も元気に動いていきたい」と喜びを語った。



「親子三代表彰」を代表として受け取った左から秋山晴英さん、秋山光彦さん、秋山幸慶さんのファミリー

ベストティーチャー賞

「ベストティーチャー賞」は、教育の質向上に貢献した教員を表彰することを目的に、今年度から新設した賞で、農学科の平野繁准教授、農芸化学科の齋藤彰宏助教、バイオサイエンス学科の中村進一教授、造園科学科の服部勉教授、国際農業開発学科の中曾根勝重准教授、北方圏農学科の寺澤和彦教授、教職課程の實野雅太助教の計7人が授賞した。



賞状を手に壇上に並んだ「ベストティーチャー」たち(寺澤教授はオホーツクキャンパスのため欠席)

選出にあたっては、学生が回答した平成29年度の「授業評価アンケート」の結果も選定基準となっているため、受賞者からは喜びの声とともに、よりいっそう身を引き締めて授業に臨みたいという決意が聞かれた。

TheNEWS 東京農大

「生きる」を支える

TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE 1891

東京農業大学

世田谷キャンパス 大学本部
大学院・応用生物科学部
生命科学部・地域環境科学部
国際食料情報学部
厚木キャンパス
大学院・農学部
北海道オホーツクキャンパス
大学院・生物産業学部

4月・7月・11月 発行

編集 東京農業大学学長室

〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
<http://www.nodai.ac.jp>

「研究室から」シダの研究で世界を変える……
北海道・オホーツクの地を体感しよう……
〔総研ニュース〕国際協力するなら東京農大で！
〔活躍する卒業生〕(厚木)
農学部 棚沢で田植え実習……
氷上のチェス カーリングで目指す日本……
「インタビュー」ブラジルで見つけた自分らしさ……

4 4 3 3 2 2

東京農業大学 収穫祭

創立127年

本祭

〔世田谷〕11月2日(金)～4日(日)
〔厚木〕11月3日(祝)～4日(日)
〔オホーツク〕10月7日(日)～8日(月)

前夜祭 〔世田谷〕11月1日(木)
〔厚木〕11月2日(金)
〔オホーツク〕10月6日(土)

体育祭 〔世田谷・厚木〕11月5日(月)
〔オホーツク〕9月15日(土)

研究室から

東京農業大学大学院
農学研究科林学専攻博士後期課程
治山・緑化学工学研究室

西野 文貴さん

「世界を変えるために日々精進」——。治山・緑化学工学研究室で博士後期課程として「シダ植物」に関する研究を行っている西野文貴さんに、森林を学ぶことを通して得てきた知識と経験の意義を語ってもらった。

シダの研究で世界を変える 人生を何倍も豊かにしてくれた東京農大の日々



①アースデイ「いのちの森」で明治神宮の森を案内している西野さん②TOKYO FMの取材を受ける西野さん。このとき撮影された映像が、「森に学び、森を創る」をテーマに行われたイベント「EARTH×HEART」の会場で流された



③西野さんは力強いメッセージを伝えてくれた。

高いレベルでの植生復元を可能にします。この研究にたどり着いた背景には、学部生と大学院で学んだ知識と現場調査の経験が活かされています」と西野さん。

中国での植樹指導

博士前期課程での研究を通して多岐にわたって学んだ時間は、西野さんをして「卒業する頃には社会に求められる人材へと成長できた」と言わしめる。そして自分の好きなことを仕事にすることができたという西野さんの実力はその後、海外でも知られるところとなり、昨年は中国での植樹指導を依頼された。ラジオやテレビ、新聞などいろいろなメディアに取り上げ

程の2年間で、論文や学会発表を通じて、文章作成能力やプレゼンテーション能力などを徹底的に鍛えることができた。その経験が社会に出て非常に役に立っている」と、西野さんは話す。「大学院生の研究は1人で行うには膨大になることもあります。その際は学部生の手伝いが必要になりますが、研究を効率良く行うためには学部生への的確な指示や指導が求められます」



子供たちに森の話を
する西野文貴さん＝
東京都世田谷区の瀬
田玉川神社で行われ
た「神さまと海と森
の教室」で

北海道・オホーツクの地を体感しよう

▼エゾシカやユキウサギ、ヒグマなどのほく製を間近で見ることができる＝展示ブース1



アザラシの毛皮に触れて、
違いを感じる高校生たち＝
展示ブース2



麦稈ロールは直径約155㌢、奥行き約120㌢、約500㌢



網走産原料100%のこだわりの一品
「学生ビール」＝展示ブース3



「食と農」の博物館では、東京農業大学生物産業学部開設30年 北海道150年事業の企画展示として『北海道オホーツク展——北海道の未来を「農」の力で切り拓く——』を開催中。

展示ブース1では、北海道とオホーツクの森林生態系、そして展示ブース2では、北海道オホーツク海の生態系を展示している。また展示ブース3では、北海道オホーツクキャンパスの学生を主人公とした展示が行われている。中でも、学生が種から育成したビール麦と、網走寒冷地農場で収穫されたホップのオール網走産原料を用いて醸造された「学生ビール」は、一般の方から大変好評を博している。

北海道・オホーツクの地で、原料を獲得することの難しさや「ものづくり」にとっての大切さを学び、それが実際の成果物となったことの「よこび」を感じとれる。なお、北海道の牧場風景がよく見られる、家畜の餌「麦稈ロール」実物2つの展示もある。見学者が東京・世田谷の地で、北海道を体感できるような展示となっている。博物館は、2020年の東京オリンピックの会場となる「馬事公苑」前にある。

〈企画展示開催期間～8月5日まで〉

目で見て触れて楽しむ「食」と「農」

国際協力するなら東京農大で！

途上国の農村開発に貢献

国際食料情報学部
国際農業開発学科

教授 高根 務

東京農大では、途上国の農村開発に貢献する多くの研究が行われている。

例えば、西アフリカの主食であるヤムイモに関する研究（総合研究所「大学院先導的実学研究プロジェクト」）がある。この研究プロジェクトでは、ナイジェリアにある国際熱帯農業研究所と東京農大教員、そして大学院生が共同で、ヤムイモの生産性向上と研究成果の現地還元を目指している。プロジェクトに参加しているのは日本人研究者だけでなく、コートジボワール、タイ、台湾からの留学生や

そうと努力している。

私自身はアフリカとの関わりが長く、農村住民の経済活動について

て社会学・経済学の立場から研究してきた。研究の過程でいつも思うのは、途上国の農村開発を進めるためには非常に他分野の専門知識が必要だということだ。作物の生産性を向上させようと思えば、作物学や土壌学の知識が欠かせない。灌漑を導入するためには工学や水管理の技術が必要になる。肥料や農薬の影響を知るには化学分野の分析が必要になる。農村住民の栄養状態を改善したければ栄養学の専門知識が要求される。農家の所得を増やすためには経営学や経済学の側面からの分析が必要になる。

マラウイの農村で調査中の高根教授



これら多種多様な専門知識をもった研究者が共同で途上国の農村開発に取り組むことで、はじめて現地住民の生活向上に貢献できる。東京農業大学にはそのような多分野の専門家が一堂に会しており、国際協力を実践したい人には理想的な場所である。

活躍する卒業生

株式会社MID VILLAGE
代表取締役

中村 守宏
(H20年度 産業経営学科卒業)
※現：自然資源経営学科

オホーソクの魅力を世界へ

この春で生物産業学部産業経営学科（現自然資源経営学科）を卒業して丸10年が経ちました。生まれて18年在京で過ごし、当たり前のように東京で大学生活を送ろうと思って世田谷キャンパス造園学科の受験に挑んだけれど見事に失敗。唯一合格したのはオホーソクキャンパスでした。

2004年の春、失意と絶望で網走の地へやってきた男が気づけば網走生活15年目に突入しました。大学生生活では、ひたすらアルバイトと部活動に明け暮れま

人生を必ず豊かにしてくれる地



「網走オホーソクを世界へ発信！」を胸に奮闘する中村守宏さん

した。特にアルバイトは、まさに「網走の地ではできない」と言っているホタテ稚貝放流、農作業、河川水質調査などでした。

網走での生活が進むにつれ、東京に居たら感じられなかったであろうこの地ならではの魅力に気づくと同時に、都会的な刺激が無いことからくる東京とのギャップを感じることも多くなっていきました。やがて「どうすればこの街での生活をもっと魅力的なものにできるだろうか」と思いを馳せるようになり、それは折しも「就活」「卒業が近づいてきた頃でもありました。

思いを形にするのは今しかないと考え、アルバイトで貯めたお金を元手に一大奮起し、在学中の2007年4月、網走市内にカフェバーをオープンさせました。大学生をはじめ、網走の人たちにとって刺激的で魅力的な空間を提供したいとの思いで始めた事業です。今では市内5店舗（2012年に株式会社MID VILLAGEとして法人化）にまで増えました。現在は、「網走オホーソクの食の魅力をクリエイトして世界に発信する」を目標に、オホーソク流水館内のレストランやエコーセンター内のカフェなど公共施設内の店舗運営を軸とした会社運営を行っています。

東京農大の学生の皆さん、東京農大への入学を考えている高校生の皆さん。網走はチャンスに溢れた場所です。研究もフィールドワークも起業も、そのいずれにもうってつけなのがオホーソクです。ここは人生を必ず豊かにしてくれる地であると思います。

さあ、一緒に「網走・オホーソク・北海道」を楽しみましょう！

農学部

棚沢で田植え実習

新たなカリキュラムで
学ぶ技法と「農のこころ」を培う

厚木



最初に田植えの仕方のレクチャーを受ける

初挑戦に真剣



頬に泥がつくのも忘れ真剣な表情で田植えに挑戦



ぬかるみにはまった学生を皆で手助け

戸惑いのち笑顔



田植えに慣れてきて笑顔を見せる学生たち

農学部は学部改組に合わせてカリキュラムを全面的に見直し、4学科の1年生全員に「農学原論」、「農業実習（一）（二）」、「共通演習」、「基礎演習」を必修科目として設置した。「農学原論」では、農学が対象とする広い守備範囲を

俯瞰する力を修得することをめざし、「農業実習（一）（二）」では年間を通じてキャンパス内の圃場、伊勢原農場・富士農場など多くの附属施設や学外の農業関連施設を活用して、農学が対象とする動植物の取り扱いや農畜産物の加工実習

に取り組むほか、観察や測定の実験、農業現場の視察などを行う。「共通演習」、「基礎演習」では大学で学ぶために必要な、情報の収集と解析、文献の講読、プレゼンテーションや議論の方法、レポート・論文作成法などのトレーニング

ングを少人数クラスで実施する。この座学・実習・演習の組み合わせは、4年間の教育体系に位置づけられたもので、学ぶ技法と「農のこころ」を培い、2年次以降の教育へ繋がるものとなっている。今回取材を行った田植え実習もその一環だ。

初感覚に戸惑つも
最後は笑顔

5月上旬から6月下旬にかけて棚沢圃場にある水田で田植えが行われた。田植え初体験となる学生

も多く、まず教員が「親指、人さし指、中指でつまむように苗を3、4本とり、土の中に植える」と、田植えの仕方の基本をレクチャー。

実際に田んぼに入ってみると、土に足がとられて想像以上に歩きにくいことに驚く▽バランスを崩し尻もちをつく▽ぬかるみにはまり長靴が抜けなくなる――など、はじめての感覚に戸惑う学生が多かった。それでも、泥で汚れることに躊躇していた学生も次第に慣れた手つきに変わり、やがて泥の汚れも気にせず笑顔に。最後は泥だらけで無事終了した。

水や土の感触は机上の学びでは得られない。東京農大の教育理念である実学主義を体現した授業といえる。秋には1年生全員が稲刈りを行うことになっている。

第26回北海道ジュニア3位となり全日本ジュニアへ出場する女子チーム



平昌冬季五輪で国民的な話題になったカーリング。東京農大の北海道オホーツクキャンパスにもカーリング部があるのをご存じだろうか。部員約50人。カーリングの聖地、北見市を拠点に日本一を目指して練習に励んでいる。「オホーツクならではのスポーツがしたい!」と入学後に

そだね~
オホーツクならではのスポーツがしたい!!

氷上のチェス カーリングで目指す日本一



れば初心者でもここに近づけるかもしれないという思いにつながり、そしてそれを実現している先輩を見ることが学生たちのやる気をより強くする。

部長の亀山祐一教授は「先生、全国へ連れて行けなくて申し訳ありませんでした」と、この春卒業した男子チームの学生たちに言われたときは、その熱い思いに目頭が熱くなった」と語る。



⑤「2018ジンスカンオープンカーリング大会」に混成チームで出場し、銅メダルで優勝した今野千尋(テックバイオ学科2年)と平井万祐子(同) ⑥第8回全日本大学カーリング選手権大会に出場した男子チーム

どで優勝を目指す。まずは、11月軽井沢で開催される全日本ジュニア選手権に出場する。氷が溶けるほどの熱戦を期待した。

活躍する農大生

ボクシング 今夏、アジア大会に出場 メダルに期待

2018年3月に宮崎県で行われた国内代表選考試合で勝利した森坂颯と成松大介(国際バイオビジネス学科4年)と成松大介(食料環境経済学科)

森坂

ロシア国際大会で敢闘賞



H23卒・自衛隊体育学校が、8月18日〜9月4日にインドネシアのジャカルタで行われる第18回アジア競技大会への出場を

決めた。両選手は2016年リオ五輪に出場して、世界の大会を経験しているだけにメダル獲得の期待が大きい。



コンスタンチン・コロトコフ国際トーナメントで敢闘賞を受賞した森坂選手(左)と山本コーロシ(右)・ハバロフスクで5月

森坂さんは、5月13日〜22日に開催されたロシアの国際大会(2018年コンスタンチン・コロトコフ国際トーナメント)で腕試しを行った。約28カ国が参加した同大会には、世界各国の強豪が集った。予選でナザルベク(カザフスタン)と対戦し、3回RSC(レフリーストップコンテスト)で好発進。準々決勝では、デニス・パロロフ(ロシア)に5-0の判定勝ちし、これで入賞が確定した。

準決勝、森坂さんはチェ・チョルマン(北朝鮮)と対戦したが、惜しくも2-3判定負け。試合後、森坂さんは「うまくごまかされてしまった」と悔しさをにじませた。しかし翌日、ヘッドコーチとして帯同していた山本さんと森坂さんはロシア

ブラジルで見つけた自分らしさ

国際バイオビジネス学科4年 竹中 奏絵さん

インタビュー

「世界展開力強化事業」現地滞在を終えて



竹中奏絵さん

文部科学省補助事業「世界展開力強化事業」に質問してそのまま討論になる、といったこともありました。

「今後の予定は?」日本の企業に就職予定です。まだどの部署になるのかもわかりませんが、もしも海外と関わる部署に配属されたら、というのに備えて、ポルトガル語は今後も勉強していきます。

「行く前と後で、一番の変化は何ですか?」自分らしさを大切にすることができるようになりました。以前は、人目を気にして自分を出さないことも多かったのですが、世界の人々と交流していく中で、自分の意見を言うという自己主張することは必要なことだと思うようになりました。

「授業はポルトガル語?」はい。日本人の学生は(私以外は)いない環境だったので、ポルトガル語にどっぷり浸かった生活でした。私自身、ポルトガル語はほとんど話せなかったのですが、はじめは本当につらかったです。みんなが楽しそうに話しているのも理解できなくて。それでも、次はこんな話題を振ってみよう、この単語を使ってみようなど、間違えを恐れずに積極的に話しかけていきました。

「高評価されるに至った。成松さんは、6月にカザフスタンの国際大会に出場し、開催国カザフスタンに惜しくも僅差で敗退した。」両選手は7月中旬から8月上旬にかけNTC

ア連盟に呼ばれ、準決勝チェスの判定に対しての謝罪を受け、決勝戦は審判長並びに森坂さんの試合に付いたレフリーとジャッジが担当から外された。森坂さんは表彰式で敢闘賞を受賞。その実力

が高評価されるに至った。成松さんは、6月にカザフスタンの国際大会に出場し、開催国カザフスタンに惜しくも僅差で敗退した。両選手は7月中旬から8月上旬にかけNTC